

はくぶんかん 旧赤穂藩校「博文館」跡発掘調査現地説明会資料

平成29年11月18日(土) 午後1時～

赤穂市教育委員会

1 調査の経緯

今回の発掘調査は、赤穂市が実施する耐震防火水槽設置工事に伴う発掘調査です。発掘調査は、工事範囲の遺跡の記録保存のためと、旧赤穂藩校「博文館」の建物位置を特定するため、約70㎡について実施しました。

2 調査地の歴史

現在の赤穂市街地の中心部は、古代から中世にかけては海や干潟ひがたのような環境で、人が住める土地ではありませんでした。人が住めるようになるのは、千種川が運んできた土砂によって陸地が広がってきた約600年前のことで、このころには北側の山麓から人々が加里屋周辺に移住してきたことが記録に残っています。しかし、この頃の生活の跡が発掘調査で見つかったことはなく、その様子はよくわかっていません。調査地も約400年前までは「畠(はたけ)」になっており、人が住むようになるのは、浅野家が現在の赤穂城を築城した1650年ころのことでした。



浅野家時代（1688～1704年頃）の赤穂城下町を描いた絵図

3 発掘調査の成果

発掘調査では大きく2つの成果がありました。

①「博文館」建物の確認

「博文館」には詳細な間取や敷地の広さを記録した絵図があり、そこから幕末の「博文館」のようすを詳しく知ることができます。今回発見された礎石の抜き取り穴や便所の跡を、この絵図と照らし合わせると、絵図の中にある建物の間取りと一致することがわかりました。また出土した遺物の年代もまさにこの時期のもので、みつかった建物が「博文館」のもものと判明しました。

確認された建物は、「博文館」の講堂(孔子を祀る靈廟や教室のある建物)の北側にあった「学寮」(貧しい生徒や遠方で通学できない生徒が利用した寄宿舍)の北西部にあたり、床の間がつけられた六畳間・縁側・便所の部分にあたります。

また、裏庭にあたりと考えられる部分には、大きな桶を埋めた穴やゴミを捨てた穴なども見つかり、「学寮」で使用されたと推測される食器や文房具などが見つかっています。

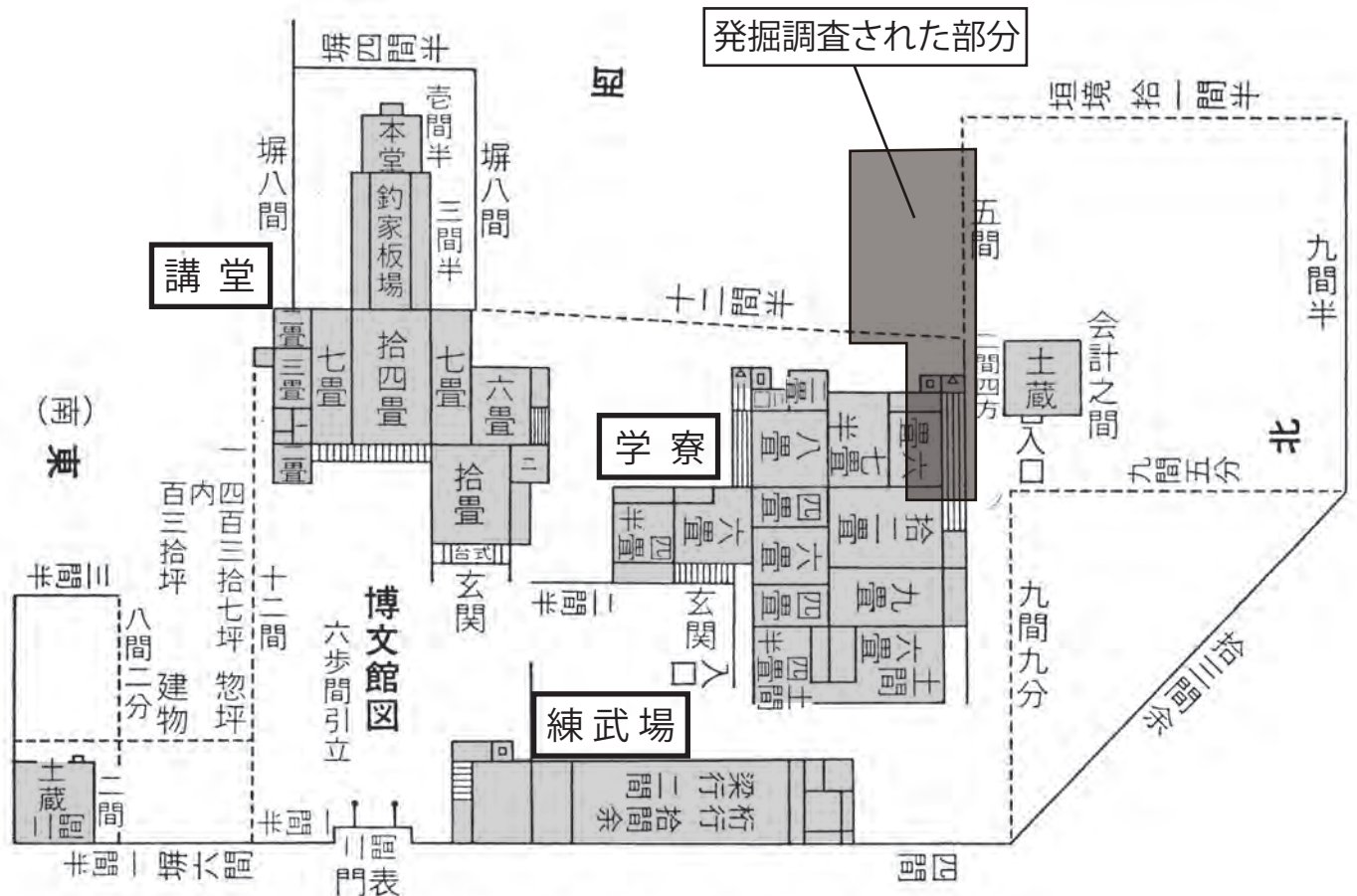


図 39 博文館平面図
(『赤穂市史』第二巻より)

②「博文館」以前の侍屋敷に関連する遺構の確認

「博文館」が開校する以前、調査地には侍屋敷がありました。この場所は赤穂城の通用門である塩屋門しおやもんの正面という重要な位置にあり、赤穂城の防衛上の理由から、有力な家臣が住んでいました。

発掘調査では17世紀から18世紀までの生活の跡がみつき、竹でできた上水道(17世紀後半の浅野家時代のもの)やゴミを捨てた穴がみついています。

ゴミを捨てた穴からは、木製容器・箸・下駄・柄杓・へら・漆塗りの仏具や膳などの木製品が大量に出土しています。これらの遺物はそのほとんどが浅野家時代のものです。中でも重要なのは、文字の書かれた木簡(江戸時代の荷札)や木製容器が約10点みつかったことです。

木製品には「伊藤五右衛門」という石高430石の上級武士宛ての荷札がみられます。「伊藤五右衛門」はこの場所に住んだ武士であることが絵図からも判明しており、ここにその屋敷があったことを示しています。

また登場する人物名には、伊藤六郎右衛門いとうろくろうえもんや伊藤有間いとうゆうかんといった伊藤五右衛門の親族と思われる人物のほか、岡林奎助おかばやしものすけ(石高1000石の番頭)・八嶋惣左衛門やじまそうざえもん(石高300石の足軽頭)といった赤穂藩の上級武士や、「梅通寺」ばいつうじ(浅野家が調査地付近に建立した寺院)などの名がみえます。ほかにも数名の人物名が書かれており、当時の物流や人のつながりを考えるうえで重要な資料となります。



木簡の出土した穴。木簡以外に大量の木製品が捨てられていました。

伊藤五右衛門殿



※ 荷札

鱈？
壹尺

番六郎右衛門

八嶋惣左衛門様

伊藤六郎右衛門



※ 荷札

浅野内匠頭内

同家赤穂方

伊藤五右衛門様
岡林李助

味曾漬雲雀

※ 曲物（おひつのような木製容器）の蓋

みつかった木製品の一部

4 まとめ

今回の発掘調査の重要なところをまとめると、次の2点となります。

①江戸時代の藩校「博文館」の建物がみつかった

江戸時代の藩校跡の発掘調査事例は珍しく、全国でもおよそ30例、兵庫県では姫路に次いで2例目となる発掘調査です。また発掘調査で絵図と一致する当時の建物跡が見つかったことは非常に珍しく、貴重な調査成果です。

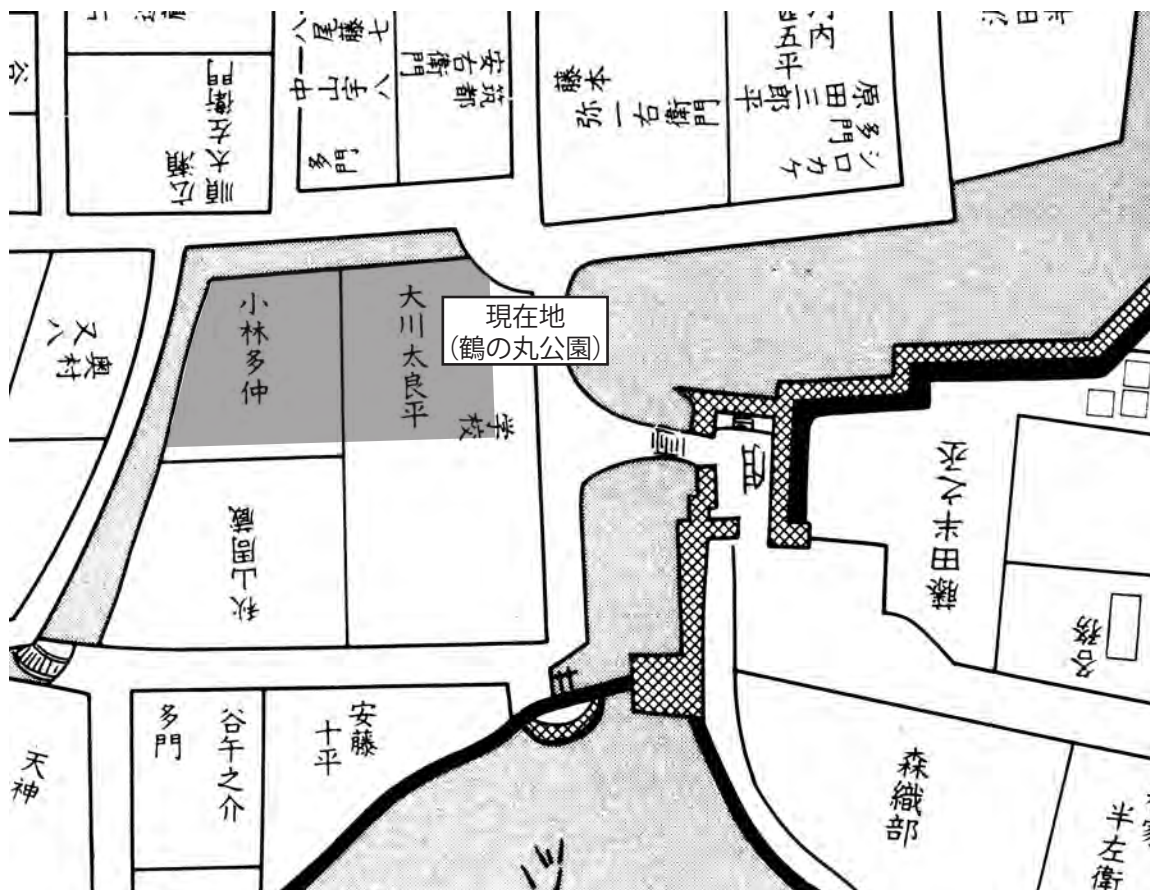
②江戸時代の侍屋敷の跡から木簡がみつかった

「博文館」のできる以前のようなすがあきらかになり、絵図のとおり、侍屋敷となっていたことがわかりました。さらに出土した木簡から、浅野家時代には伊藤五右衛門の屋敷であったことがわかり、絵図の正確性を示すものとしても大変貴重です。

木簡は出土すること自体が非常にめずらしく、浅野家時代の家臣の名前が書かれたものはさらに珍しいものです。こうした木簡は赤穂城跡では比較的多く見つかっていましたが、赤穂城下町跡では初めてのこととなります。

5 遺跡の今後

今回の発掘調査の成果を受けて、赤穂市では関係機関と協議を行い、耐震防火水槽を「博文館」の建物を避けるように設置するよう、位置を変更しました。また、発掘調査では見つかった遺構を全て掘ってしまうことはせず、一部はそのまま埋め戻すこととしました。このようにして、貴重な遺跡と文化財を未来へと残し、伝えていきます。



森家時代（1777～1797年頃）の赤穂城下町を描いた絵図。「学校」とあるのが藩校の博文館。
「大川太良平（おおかわたろへい）」とは、赤松蘭室のこと。

このころの絵図によれば、この場所は「伊藤五右衛門」という人物が居住する侍屋敷と
なっています。その後、1730年頃までは侍屋敷であったことがわかっていますが、1770年
頃には空き地となっていたようです。

1776年、この空き地に藩校を開校する要望が、赤穂藩の藩儒（藩が登用した学者）の
赤松蘭室から出され、1777年に藩校「博文館」がこの場所に開校します。

博文館は明治時代まで赤穂藩の藩校として利用されていましたが、明治5(1872)年の
学制発布により、博文小学校となりました。この博文小学校は現在の赤穂市立赤穂小学
校の前身となる学校です。博文小学校は明治9(1876)年に他の小学校と合併・移転し、
空き地となった調査地には、旧赤穂藩主の森家の祖先を祀る赤穂神社（現在は大石神社
に合祀されている）が遷座してきます。

しかし、この赤穂神社も明治44(1911)年に他の場所へ移転し、調査地は空き地になり
ました。空き地になった後、民家・倉庫・水田・畑になったのち、昭和46(1971)年の上仮屋
地区区画整理完了後に、現在の「鶴の丸公園」となり、現在へといたります。

田畑・裏庭

埋桶の跡やゴミ捨て穴

敷地の境界となる溝や穴
(17~18世紀)

こちら側は
地面が低い

方形の穴
(18世紀後半)

浅野家時代の
木簡が出土した穴
(17世紀後半)

浅野家時代の
侍屋敷
旧上水道(竹管)
(17世紀後半)

明治時代以降の石垣の一部

便槽

大便所

床の間

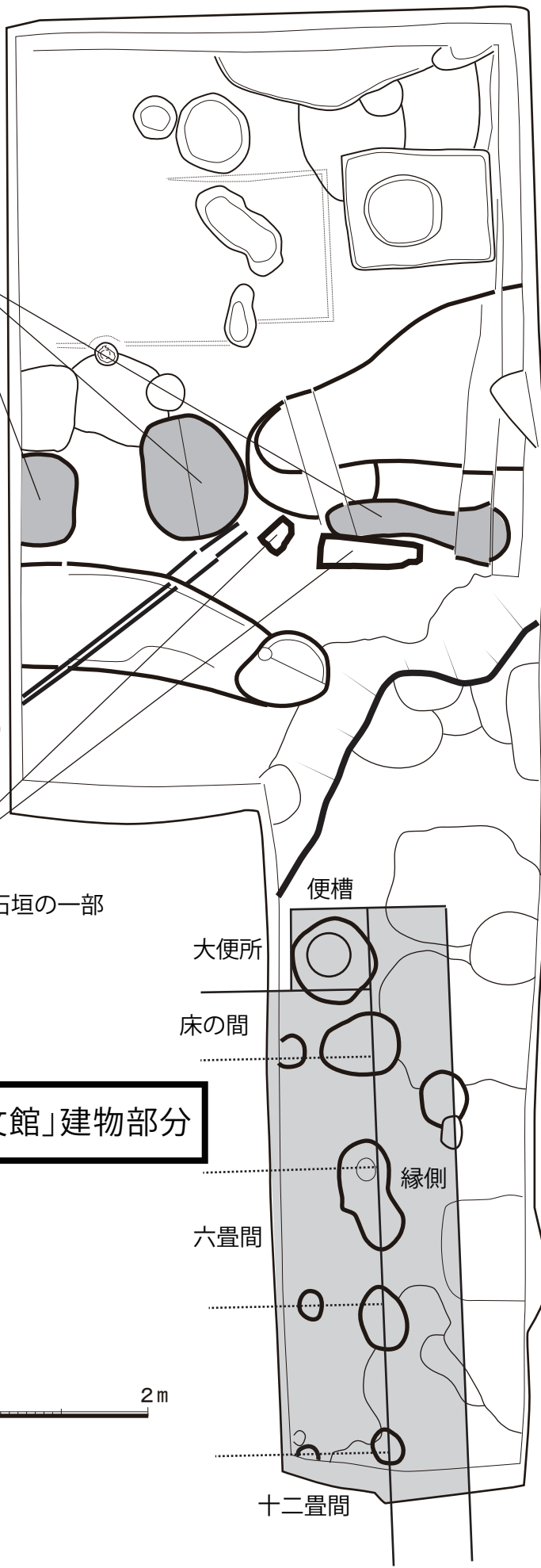
「博文館」建物部分

縁側

六畳間

十二畳間

0 2m



関連年表

調査地のようす

享徳年中（1452～1455年）	岡豊前守が加里屋に砦を築く。（加里屋古城）	
文明・長享年中（1469～1489年）	塩屋高山山麓から加里屋上町に集落移住。	
慶長5（1600）年	池田長政、赤穂を治める。 （以後、1645年まで池田家が赤穂を治める。）	
慶長5～7年（1600～1603年）	現在の赤穂城の位置に「搔上城」が築かれる。	
元和2（1616）年	赤穂上水道完成。	
正保2（1645）年	浅野長直が常陸国笠間から赤穂へ入封。赤穂藩主となる。 （以後、1702年まで浅野家が赤穂を治める。）	田畑
正保年間（1645～1648年）	赤穂城の塩屋門西に「梅通寺」と「天神宮」が建立される。	
寛文元（1661）年	浅野家により赤穂城完成。	
元禄14（1701）年	浅野長矩、刃傷事件により切腹。（元禄赤穂事件） このときまで調査地は伊藤五右衛門の屋敷になっている。	侍屋敷
宝永3（1706）年	森長直、赤穂藩主となる。（以後明治まで森家が赤穂を治める）	
享保11（1726）年頃	調査区は森家家臣の松本儀左衛門の屋敷になっている。	
延享4（1747）年	赤穂藩主・森忠洪が赤松滄州を藩儒に登用。 以後、藩校設置の提案がされるも、財政難のため聞き入れられず。	
安永5（1776）年	赤松蘭室による藩校設置の提案が許可される。 ※この際、裕福な町人から資金援助を受けることを説明し、許可されたとされる。	空き地
安永6（1777）年	赤穂藩主・森忠興によって藩校は「博文館」と命名される。 「博文館」が塩屋門前に完成。 赤松蘭室が「博文館」敷地内北側へ移り住む。	
寛政9（1797）年	「講堂壁書」「学寮控」などの藩校内での規則が制定される。	
享和2（1798）年	藩校入学年齢が最低8歳から6歳に引き下げられる。	
安政5（1843）年	村上天谷によって「博文館」の改革案が示される。 聖廟（講堂）や学内施設の修理が実施される。	藩校「博文館」
明治4（1871）年	廃藩置県。	
明治5（1872）年	学制発布。	
明治6（1873）年	「博文館」の講堂を利用し、博文小学校が開校。 後に襄州小学校と改名。	博文小学校 （襄州小学校）
明治9（1876）年	襄州小学校が他の小学校と合併。蓼州小学校として赤穂城内へ移転。	
明治13（1880）年	赤穂城内から調査地内に赤穂神社が遷座。	赤穂神社
明治44（1911）年	赤穂神社が上仮屋北（現在の赤穂あけぼの幼稚園の位置）へ遷座。	
大正～昭和	調査地は田畑や住宅地になる。	田畑・住宅地
昭和46（1971）年	上仮屋地区区画整理事業完了。 調査地は鶴の丸公園となる。	鶴の丸公園
平成29（2017）年	発掘調査実施。	